

季
註
解

改正月令博物筌

三秋部

四

俳諧資料カード

年代

0-18
元正

編者
(筆者)

書名

改正月令博物筌

備考

三秋部
四

(下垣内蔵)



三秋之部目録

三秋のふかへ印あつた前より俳の季も用も物く

時令

此部実時候かかりたること出せ
④⑤をとりとる七月又八月も用ふ

△秋風 秋 初 △秋雨 秋 二

△秋霞 秋 三 △秋雲 秋 三

△秋虹 秋 三 △白露 秋 三

△袖のふる 秋 三 △霧 秋 三

△つるけき 秋 三 △霧の香 秋 三

△さきりのまぶしく 秋 三 △さきの玉 秋 三

△川きり 秋 三 △さきり雨 秋 三

△立人 秋 三 △立人 秋 三

△秋日 秋 七 △月 秋 七

△ささげ月 秋 七 △月の桂 秋 七

△月の霜 秋 九 △月の都 秋 九

△月の氷 秋 九 △胸の月 秋 十



三秋之部目録

三秋のふかへ印あつた前より俳の季も用も物く

時令

此部実時候かかりたること出せ
④⑤をとりとる七月又八月も用ふ

△秋風 秋 初 △秋雨 秋 二

△秋霞 秋 三 △秋雲 秋 三

△秋虹 秋 三 △白露 秋 三

△袖のふる 秋 三 △霧 秋 三

△つるけき 秋 三 △霧の香 秋 三

△さきりのまぶしく 秋 三 △さきの玉 秋 三

△川きり 秋 三 △さきり雨 秋 三

△立人 秋 三 △立人 秋 三

△秋日 秋 七 △月 秋 七

△ささげ月 秋 七 △月の桂 秋 七

△月の霜 秋 九 △月の都 秋 九

△月の氷 秋 九 △胸の月 秋 十

△居待月 △十六夜月 秋十丁

△伏待月 △寢待月 秋十丁

△更待月 △廿四日 秋十丁

△廿三夜月 △十五夜月 秋十四丁

△有明月 秋十丁

△待月 秋十丁

△残月 秋十丁

△照月次 秋十丁

△星月夜 秋十丁

△身入 秋十丁

△秋の聲 秋十丁

△秋野 秋十丁

△秋山 秋十丁

△秋水 秋十丁

△秋夕 秋十丁

△秋夜 秋十丁

△龍田姫 秋十丁

△秋宮口 秋十丁

△律の調 秋十丁

△千秋樂 秋十丁

△鶉衣 秋十丁

△田の庵 秋十丁

△小田守 秋十丁

△寮山子 △鹿鷲 △添水

△鳥さび △秋十丁 △添水 △碓 △鳴子

△引板 △あり 秋十丁 △焼帛 秋十丁

混雜

此部の日令時令草木など
小かくりざり品と出す

草木

此部ふり三秋ふりころ
草木をいふ

△柎 △柎 △柎 秋十丁

△荻 秋十丁

△薄 △あめとくた △一りく薄 秋十丁

△葛葉 △まきむし 秋十丁

△忍草 秋十丁

△蔦 秋十丁

△芭蕉 秋十丁

△景天草 秋十丁

△草花 △千種の花 秋十丁

△鶏頭花 秋十丁

△雁来紅 秋十丁

△白茅 △茅萱 秋十丁

△萱川 △萱菅 秋十丁

△角觥草 秋十丁

△天子草 秋十丁

△萩殿 △萩の戸 秋十丁

△花壇 △花畠 秋十丁

△鬼灯 秋十丁

△新番椒 秋十丁

△若烟草 秋十丁

△布瓜 秋十丁

△薑 △物生姜 秋十丁

△牛房引 秋十丁

△芋 秋十丁

△頭の芋

秋 芋

△薯蕷

秋 芋

△零餘子

秋 芋

△耳たし

秋 芋

△果

秋 芋

△柿

秋 芋

△さつぷり柿 △柿の種類

△梨子

秋 芋

△耳たし

秋 芋

△秋田

秋 芋

△新米

秋 芋

△落穂

秋 芋

△新米

秋 芋

△稻

秋 芋

△新米

秋 芋

△稲

秋 芋

△新米

秋 芋

△綿取

秋 芋

△挑吹

秋 芋

秋生類

この部ハ三秋ふりてふ生るつゆいふ

△鹿

秋 芋

△鹿

秋 芋

△紅葉鳥 △みぎきり △かやき △もぐら

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

△鴉

秋 芋

八十の偶数なり故小陽と扶
 け陰と抑ふる術小陽月陽日
 小食とる物とる陽物を食し
 て陽と旺ふ一陽を扶く先春
 餅草餅粽索餅栗等の物
 と供御ふ献るこしるり故小
 節供くつ入江家次第小委く
 見えくり正月の七日とりのこ
 節供の初せし守清少納言
 の枕草子にも粥の節供泰
 しくつるも此事ありとせ
 ずこ正五九月と三長月や
 定らまじる仁明帝の御宇
 承和三年の詔とや

秋之部

三秋のちとふ平何れものい
 る秋のふ備の季も用ゆるやう

時令

此部は時候よゆりたる
 事を物に因りてあるなり
 七月又ハ八月より用ゆる

秋風

秋の風いそげしく何れも
 のかりふみよきとてあり

後拾遺

俊定

拾遺愚

秋風漢野 為家

新後撰 雨居秋風 二葉入内左
 人目見ぬ宿此秋りつをこつて
 秋は風乃はそよこそしき

詞 秋の葉秋の下葉 楠の葉 田の
 圃 沙草生あさびき 藤系 小菅 丸
 るいよ枝の秋風 杉塔の松 紅葉 草
 も色づく 門田の輪系 秋のまげ

連 秋風のきのうはまはぬ秋くる 紀巴

俳 秋風や雀へ竹の葉のふりかへ 困女

狂 夕ぐれに門のやぶと戸をくづして
あつたまのふに秋風かひく 自由

詩 秋風五字對句

山樹含斜日 晚風連殺氣

ヤミノジユモクニ
ニフヒノカゲヲミセ
ニフカセガフケハモノ
スゴヒケレキニナリ

池風澄早涼 新月照邊秋

チフウ スニササレウツ
イケノカセガハヤウ
ニカツキガヘンドロ
アキダレキヲミセル

詩 秋風七字對句 詩礎

秋風江上濤無際 白雲飛

シウフウ コウニウナミナシカサ
アキカセガ江ノウヘニフケバ
シラクモガ
ハヤウユク

暮雨舟中酒一樽 風滿樓

ボウ レウチウサケイツソン
カセミツロウニ
カセガニカヒ
ヲフキヌク

詩 秋風詞 杜牧

琪樹西風枕簟秋 楚雲湘水懷同遊

キジュニセイフウチンダンノアキ
ツウニシヤウスイヨモラドツユラ
心ハバ子サミノ
心ガ秋ノイテキダ

少年今白頭 高歌一

セウニシケツハツタツ
キノフソカイトキカツイケラ
ノレラガ首トナツタトオモフ

秋 雨 高 歌 一

あきさめ 雨とさざれちどのきうよ

目ををきく 膝中しぬ心のまじしう 山村

雨の夜の明中しぬ心をまじしう

秋 夫木 為家

秋風乃をそひく 村を

千首 秋雨打窓 師兼

秋風ふるき 屋瓦の窓のまきまき

詞 秋風と流る 葉木のまきまき

秋のむらさき 村雨をく 終く

秋のむらさき 村雨をく 終く

連 秋をゆへ 窓の雨 宗根

秋をゆへ 窓の雨 宗根

秋の雨 初葉

狂^{あはれ}あゝ毎^{ごと}とこや^トそ^らの村雨^のか
さ^がも^も穂^ほ田^たも^いそ^けし^くる^る常^{じょう}景^{けい}巻^{まき}

詩 五字對句

同上

晴^{せい}山^{さん}疎^そ雨^う後^ご

白^{はく}雲^{うん}當^あ嶺^{りやう}雨^{あめ}

ハタル山ニサツト雨ノ多ク

シラクモカムカフノ三子ニカハツテアメカフル

秋樹断雲中

黄葉遠階風

ニウツエダンノウケンチ

クハウエフメカカイヲカセ

アキノジュモガタエノ

キバニタホノハガチツチ庭

クモノ中ニニエ

ノフミタニツメカハト風カフク

詩 七字對句

九曲暮雲連雁宕

秋風飛

キクキヨボノツツフナリカントウニ

シウフクトブ

雁宕山ト云フ山ニテツツク

アキカセカ
タカクフク

片帆秋雨落錢塘

帶雨秋

ヒトツツク
舟ノ秋雨ノフル日

アメニアフテ
秋ガシキカ深ヒ

秋霞 朝^あ海^{うみ}又^{また}東^{あづま}の^の夕^{ゆふ}烟^{けむり}く^くと

の^のと^とく^くん^んき^きり^りの^のう^うら^らは^はら^らつ^つい^いく^く日^ひ和^わは^は

の^の朝^あ天^{てん}雲^{うん}の^のや^やけ^ける^る紙^し船^{せん}や^やけ^けと

の^の二^に三^{さん}日^{にち}の^のう^うら^らは^はら^らつ^つい^いく^く日^ひ和^わは^は

の^の西^{せい}又^{また}東^{あづま}の^の夕^{ゆふ}烟^{けむり}く^くと

の^の朝^あ天^{てん}雲^{うん}の^のや^やけ^ける^る紙^し船^{せん}や^やけ^けと

の^の西^{せい}又^{また}東^{あづま}の^の夕^{ゆふ}烟^{けむり}く^くと

の^の朝^あ天^{てん}雲^{うん}の^のや^やけ^ける^る紙^し船^{せん}や^やけ^けと

の^の西^{せい}又^{また}東^{あづま}の^の夕^{ゆふ}烟^{けむり}く^くと

の^の朝^あ天^{てん}雲^{うん}の^のや^やけ^ける^る紙^し船^{せん}や^やけ^けと

の^の西^{せい}又^{また}東^{あづま}の^の夕^{ゆふ}烟^{けむり}く^くと

の^の朝^あ天^{てん}雲^{うん}の^のや^やけ^ける^る紙^し船^{せん}や^やけ^けと

の^の西^{せい}又^{また}東^{あづま}の^の夕^{ゆふ}烟^{けむり}く^くと

の^の朝^あ天^{てん}雲^{うん}の^のや^やけ^ける^る紙^し船^{せん}や^やけ^けと

の^の西^{せい}又^{また}東^{あづま}の^の夕^{ゆふ}烟^{けむり}く^くと

の^の朝^あ天^{てん}雲^{うん}の^のや^やけ^ける^る紙^し船^{せん}や^やけ^けと

の^の西^{せい}又^{また}東^{あづま}の^の夕^{ゆふ}烟^{けむり}く^くと

の^の朝^あ天^{てん}雲^{うん}の^のや^やけ^ける^る紙^し船^{せん}や^やけ^けと

の^の西^{せい}又^{また}東^{あづま}の^の夕^{ゆふ}烟^{けむり}く^くと

の^の朝^あ天^{てん}雲^{うん}の^のや^やけ^ける^る紙^し船^{せん}や^やけ^けと

の^の西^{せい}又^{また}東^{あづま}の^の夕^{ゆふ}烟^{けむり}く^くと

の^の朝^あ天^{てん}雲^{うん}の^のや^やけ^ける^る紙^し船^{せん}や^やけ^けと

の^の西^{せい}又^{また}東^{あづま}の^の夕^{ゆふ}烟^{けむり}く^くと

の^の朝^あ天^{てん}雲^{うん}の^のや^やけ^ける^る紙^し船^{せん}や^やけ^けと

菱のこ神のうへをふとれたるを云
 病のこは玉の足こそくを神の
 露の神よをくたつるをも神のちあり
 うらよもえつちもたれ病のをたて
 ろりしこくありあめりたるもふ
 こ海よりらゆるまばなり
 浪濤も浪気りこりこりあ
 ぶくもこのことあり玉の病玉
 潤いもよにまのおとれたか
 又見よとていふなり

秋建仁教合

寂蓮

晴雨つるゆ入日のつらう神さえて
 らぬこむきあくのむく病
 十五番教合 通具

入日こむきあくのむく病
 志ぐしほけをれ村雲やもろ
 真應百首 浅茅雨踏 為家
 ぢけがわらわしをろの歩ぢ人の
 ことごとくは古のま玉
 夫木 名石露 僧正初意

宮城のあなはらけ小萩をこりれ
 なのぼる病うやま月うま
 後拾遺 朝霞 範永

こいし来つる神よ病も秋ぬま
 移りやしぬるも病花より
 千首 草花 ぬ尹

秋はとまえる萩の病をこりり
 一れくまくる秋のまはは
 家集 落秋秋玉 信輔

詞 結ぶ。まよく。おまき。ふりまき。ふる。
 月中らるる。萩。まてつちありくのま
 病のこま。病の秋系。萩の上病。萩
 の下病。菊の病。菊の上病。は
 ゆれま。菊。病の下深。ま病
 のま。小毎の病。まま。まの病。
 ま花。病く。のく。ま。ま。ま。
 うらよもえつちもたれ病のをたて
 病のま。ま。ま。ま。ま。ま。

金莖

漢武帝承露盤トテ罍
銅ニテ高サ二十丈ニ作り建

章宮ニテ一夜天ノ甘露ヲ兼テ玉
屑ニ和シテ飲タリトアリ

霧

△きりの海△きりの香△霧
のまがき△きりけちづく

△きりの下る△川きりの△きり雨

△きり五人。△きり霧之降ハ雲也

△きりりり地蒸せざるハ雲ト云

後して無せざるを霧ト云ハ皆

霧の類也△きりのりり秋ハ

霧ハ雨として船ハ△きり其まき

海ハ霧ハ風拵ル△きりの色ハ

物をるごとくあるを△きりの海

△きり△きりの海△きり△きり

の霧ハ霧ハ香あり△きり△きり

るごとく△きり△きり△きり△きり

きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

川△きり△きり△きり△きり△きり△きり
小雨△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

△きり△きり△きり△きり△きり△きり

の浦朝日山。入相のうの雪方立る。
きりりとの。秋の族々。日新日新と
りる。日新務くよ山のそけ日新よ
あづみの月日。月。風よをれ新。風り

いふよふ。まことひる。極寒よりひく。
尾よまよひく雪原き谷。海波のうき

霧の離

三つのもまがたまたま川 霧水
まがたまたませせせせしうり 乃のみ

のきいしてそこそこまきまきか舟儀とと
のきりうらふゆく侍るよとあるをこし

舟舟松ざりのきり 麻 申うつまこし

風いづ朝霧るし 周の松 専以

霄園や霧れうきの鳴海返 其角

狂 椎長老

おきりや相のまうたの柿のきと
ことりの舟人きりぬまうし

詩 霧詞

伏越

水霧雑山烟 水上ノキリガ山カラ立

冥々不見天 冥々ノホノガ多レテソラモ

聴猿方小岫 サルノコエヲキイテハヤ

聞瀬始知川 瀬ノ水ヲトキイテ合

漢人惑漢浦 漢人ノハオキ庄ウラ尺

行舟迷沂水 舟ヲ迷フハフチノボリ

日中氛霽盡 日中ノキリガ

空水共澄鮮 空水トモニツモイツモヨ

秋月 秋ノ月ノヨシキニシテ

秋のうらきかよももつと後かく書や
ときをすもよび

秋の月やまらしむと長務雪光

狂 今入り輪も海土のふんぞりも

秋の月やまらしむと長務雪光

月 月の光の輝くと淮南子

き月△月やうきまらうせり 和名月

すも男 月の光の輝くと淮南子

き月△月やうきまらうせり 和名月

かき 五出。ほき人 出。こ 出。あ 出。

ら男 秋出。うら 秋出。うら 秋出。うら 秋出。うら 秋出。

素娥 素娥。玄兔 玄兔。因核 因核。活庄 活庄。玉 玉。心 心。百陽 百陽。雜組

金盤 金盤。何國 何國。香苑 香苑。金環 金環。自 自。六 六。全 全。銀盤 銀盤。

水鏡 水鏡。謝 謝。月 月。賦 賦。水輪 水輪。東 東。漢 漢。詩 詩。集

望舒 望舒。淮 淮。南 南。子 子。夜 夜。七 七。天 天。問 問。盤

尺 尺。を を。定 定。え え。く く。の の。は は。舟 舟。瀾 瀾。う う。こ こ。柳 柳。は は。春 春。の

影 影。み み。か か。と と。と と。甚 甚。い い。雲 雲。月 月。を を。鼓 鼓。そ そ。の の。影

痛 痛。人 人。と と。後 後。し し。て て。秋 秋。を を。記 記。し し。て て。秋 秋。の の。意 意。を

秋 秋。を を。甚 甚。い い。と と。し し。て て。秋 秋。を を。記 記。し し。て て。秋 秋。の の。意 意。を

冥 冥。を を。秋 秋。の の。令 令。を を。記 記。し し。て て。月 月。の の。意 意。を

咽 咽。ら ら。け け。し し。よ よ。く く。月 月。の の。意 意。を を。記 記。し し。て て。秋 秋。の の。意 意。を

連 連。繼 繼。り り。よ よ。三 三。秋 秋。の の。後 後。を を。繼 繼。り り。よ よ。八 八。月 月。の

七 七。月 月。の の。後 後。九 九。月 月。の の。後 後。又 又。十 十。五 五。月 月。の

中 中。方 方。り り。多 多。暑 暑。始 始。一 一。く く。月 月。の の。意 意。を を。記 記。し し。て て。秋 秋。の の。意 意。を

真 真。文 真文。親 親。聚 親聚。の の。十 十。一 一。日 日。を を。記 記。し し。て て。秋 秋。の の。意 意。を

八 八。月 月。の の。都 都。を を。記 記。し し。て て。秋 秋。の の。意 意。を を。記 記。し し。て て。秋 秋。の の。意 意。を

など など。秋 秋。連 秋連。其 其。不 不。く く。う う。出 出。と

の上 の上。弦 弦。下 下。短 短。月 月。の の。畢 畢。月 月。の の。盈 盈。虚 虚。の の。...

を を。と と。多 多。言 多言。故 故。月 月。桂 月桂。酉陽 酉陽。雜 雜。俎 俎。二 二。曰

樹 樹。ア ア。リ リ。高 高。サ サ。五 五。百 百。丈 丈。其 其。木 木。ヲ ヲ。斧 斧。ヲ

以 以。テ テ。伐 伐。人 人。アリ アリ。ツ ツ。ノ ノ。名 名。ヲ ヲ。具 具。剛 剛。ト

云 云。フ フ。常 常。ニ ニ。伐 伐。ル ル。ニ ニ。斧 斧。ノ ノ。ア ア。ト ト。伐 伐。ル ル。一

随 随。ツ ツ。テ テ。イ イ。エ エ。テ テ。ツ ツ。イ イ。ニ ニ。伐 伐。リ リ。ツ ツ。ク ク。ス

コ コ。ト ト。ヲ ヲ。エ エ。ズ ズ。ト ト。云 云。ヘ ヘ。リ リ。依 依。テ テ。オ オ。カ カ。ツ

ヲ ヲ。男 男。ノ ノ。カ カ。ツ ツ。ラ ラ。ノ ノ。花 花。一 一。タ タ。ハ ハ。オ オ。カ カ。ツ ツ。ラ

ノ ノ。モ モ。ミ ミ。ガ ガ。又 又。ハ ハ。オ オ。カ カ。ツ ツ。ラ ラ。ノ ノ。カ カ。ゲ ゲ。ナ ナ。ト ト。

イ イ。エ エ。ル ル。ヨ ヨ。シ シ。ナ ナ。リ

秋 秋。久 久。ク ク。レ レ。月 月。の の。う う。ら ら。り り。秋 秋。暮 暮。れ れ。が

○**庫** 塵や月の桂の花やうる昌叱

○**佛** 空密の月のかつた花あり許六

○**婦** 娥 昇ト云フ人不老不死ノク

○**二** 拜カ妻ノ婦娥又ス三服シテ

月ノ中ニ奔リノホリタリト云フ

○**故** 重ナリ事支類聚ニ出ヨツ

テ月ノ異名ヲ婦娥ト云ヘリ

○**月** 都 此世經云日月天の宮殿後

由向あり北面乃垣藩ハ七室

○**秋** 夫本 為家

○**佛** うりのたり月の都の女郎花真室

○**月** 鼠 譬喻經ニ日鹿ニ逐レタル

キ鼠ト有テカノ草ノ根ヲ齧カノ里

キ鼠八月之白キ鼠八月之コレ月日ノ

早クタツタトヘテリ月ノ鼠ト云事

此經說ヨリ起レリ

○**秋** 秋のひまけ根と心鼠ぞと

○**佛** 月の影のかりし世齒は親父の惟然

○**月** の霜 月の地は照がまね

○**秋** 秋といふけ初るもひきてて

○**佛** 高少くしうそどが月の手夜式本枝

○**狂** 高少くしうそどが月の手夜式本枝

○**詩** 李白 牀前看月光

○**疑** 是地上霜

○**峯** 頭望山月

○**低** 頭思故鄉

月の雪

月の光白く
雪は如く

月乃霜と曰く

雪をふかたのし物と九をう
く秋もつと秋の月をげ 三玉

如泉

在 美あつた月の秋はたまふして
さきまゆきの海はくく 真海

月氷

月乃ひくう氷う
如く

日まよふ 都の秋をえんまかせは
おどろくまげの秋をううう 後成

真如月

真とはものまよふ
如とい月雲あかきて

も俤をつひははるうううう
一切の妄想う 海はぬとま如
の月とく入なり

夫本

家隆

ひえに 次安も月もさやう
うたせはてしとさぐのとも

心月

心月の月とあつとく
あつとく

秋 心月の月とあつとく
池の心月の月とあつとく 信貫

胸月

胸月の月とあつとく
しよとよむゆなり

俳 意わふ胸の月秋の月とあつとく 野放
あつとくして 如行

不見月

月を隠せりなり
後雲をきし

狂 心月の月とあつとく
糸でのる月の名さめりが那 景天

詩 七字對句

詩礎

四野霧凝空寂寞

空對酒

野ニ出テ四方ヲミル月ノナイ

ムハカリビヤ

九霄雲鎖絶光輝

懶登樓

ソラニ雲カオホフテ月

ニカイヘソツテ月

月乃詩教連俳

志乃

秋 金葉

皇后宮肥後

月を見くかりかたしむれまきうらむ
ゆくをよもあはれあはれくまはるは

実家

千載
秋乃秋のこゆとほくはくはらこそ
かのうらうえゆかゆ月よる

知家

續後撰
さぐしんかきしよ乃秋もあまきだ
月うらむしのわけやまうらん

ゐ家

續古今
月秋も小秋風さし 天の系
中りては月の夜そあけふあ

夜美

續拾遺
かきぎ乃こもさか指も白さえ乃
とら霜いそぐ秋の月うらむ

西外

玉葉
人も見ぬうらたれはをききても
ともしらん月のうけとこそそ人

後成

續千載
あつひてもまよぬ月の秋をそ人
よりたかあは乃霜のふるさを

新古 田家見月 兼大政大臣
風はふらふ田の産ぬあは月や
かろしよむとふ水たれらん

後系極

月清 池上見月
池をよむまををよとせりひたり
本れ下りきあは乃月うらむ

詞

月乃乃也。月のよきく。月のとがさ
月結あ。月のさうり。月の舟。初とえ

て

ち。月。月。けのあ。月のうら。月の
秋。月あや。月よ。男。月の出。や

月

月の入。や。月の都。月のき。月の
秋。月清。月のな。不乃や。く。

月

月白き。のく。月。月。月。月。秋
け。月。月。月。月。月。月。月。月。

月

月の。月。月。月。月。月。月。月。
月。月。月。月。月。月。月。月。

月

月。月。月。月。月。月。月。月。
月。月。月。月。月。月。月。月。

〔連〕宿霧の世にがれ出の月の赤碩

ふのさうの月い見し世の初のみさ末碩

月やふの影をうく江の秋乃水宗祇

念ふ見く月のうらなる我ふる又賦盛

〔俳〕きらびの月見せせたるおよ水の月を来

撥つらしむらびおさう草乃月芭蕉

月の影をうく影をうくあふらん 未定

かゝるとと死出よあさ月夜を 龍雪

引けくはにふかの涙を月夜に 玄考

〔狂〕にっ必しをにっはらうははつれど

にっはらうの月らんがたの月 貞本

おれとや中墨つさ中いあふびしと

あんと入るる月乃夜まゝる信海

〔詩〕月詞 東坡

一更山吐月 月が出ル

玉鏡吐微瀾 玉ノカミミガサナニ

正似西湖上湧金門外看

テウド西湖ノ上ノユキニモニト云トコロノ

〔詞〕月ノ詞 李白

小時不識月 月ヲ白タマノタ

呼為白王盤 月ヲ白タマノタ

又疑瑤臺鏡飛上青雲端

又タ玉ノウテナノカニガ青雲ノアタリヘ

〔詩〕待月五字對句 同上

玉軫鳴風久 自是登樓早

金輪出霧暉 非于出海邊

新月 娥眉。法法。破環。抱朴子

新月も又ハ連儂ハ八月十八夜と

新月 沉鈞細。他より新月

新月の月をのふ之釋徳慈が詩

と他は三ノ次子て各月乃る
勿論之より、新月ハ後月と云

臚うらとも何なに尺ぶ者ものを考かへた方かたなり

詩 新月しんげつ織オリ々々抹ぬぐ黛はい眉まゆ こゝに三日月

三月月 臚うら 文選ぶんせん 異名いみな 哉さい 星せい
明あき 和名わな 表月ひょうげつ あまふし出

○月三月よりて總すべとる凡たゞとつり
○その月大なるは二月又月明あきらう

ふあるその月小なるは二月又明あきらう、
なる哉さいとは始はじと云ふも之こゝニニ支し合あ合あ出で

歌 於お送そう志し 本ほんの風かぜり、根ね々々迄いたき三日月の
うげつりいなるいふがやの死し まゝ家

まホ ぬるり人ひとのまほ梅うめはよるへり
まろりぞをうき三日月のうげ 和家

俳 何なにこゝに誰たれが捨すてて三日月を考か
人ひとのまのきりやうとや三日月を圃ぼ

三月月や月つきさみあれ水みづの月つき昔むかし哉
野ののまのきりやうとや三日月の月つき連つら二

狂 物ものあしの雨あめ免ゆるへとくさうんまや
骨ほねをぶくく三日月の月つきうけ貞まこと佐

弦月 △弦せん張ちやう月げつ △二弦にせん △下弦げせん
△のあり月つき △くさうり月

異名 彼か後ご 古こ宗そう府ふ 輸ゆ良りやう 杜と詩し 暈うん 缺けつ
淮南ひなん子し 如に朝あさ 文ぶん選せん 恒こゝろ月げつ 詩し 經きやう 和わ名な いた

こはれ月。上弦じやうせんとらふは毎月七八日多
なり下弦げせんとらふは廿三四日也 歌うた各おの自づか

強つよくは月の形かたちのちのち変化へんげんは以もつて月の形かたち
引ひと張ちやうさうとくたをよる張ちやう月げつと号なづ

歌 月つきを結むす弓ゆみ張ちやうともつちうらひの端は
うりく入いよそありあ歌うた 順のり

狂 疾やくとあまかき月つき乃のくくハ
竹たけの折やぶさく入いよこそあれ まゝ未

予月 詩歌しとかは予月よつきに委あたは
まの八月 十五日のあまは月也連儼れんげんの

八月十五日の事ことに記しす
八月十五日の事ことに記しす

不知疾月 既き乎や哉さい早はや曉あけ。二
朝あさ缺けつ。十六日じゅうろくにちの事ことに記しす
十六日じゅうろくにちの事ことに記しす

歌 新六帖

ぬき

秋風ニ吹テ新雲をいでて中ノで
まじりかてさういさよふなり月

詞 三ののたはまうりまうりいさよふ

さよふいさよふ月。山のたのいさよふのり

俳 冬月のいさよふ山 松尾

立待月

既立待月。今宵

詠 須臾の回をまらぬ立
待月のいさよふ月。今宵

連俳 八月とも又二秋とも

歌 新六帖

我門にじまうりいさよふ月。今宵

俳 善信を掛て八月とも

居待月

物さるれば居てまらぬ月。今宵

狂 宵のろく小町はついでいさよふ

伏待月

伏待月と伏見の月とをいさよふ

歌 拾玉 巻後

輪舞のうげりあはれ其の夜の

寝待月

廿日の月まの刻は出るれなり

歌 宵のろく小町はついでいさよふ

二十日廿月のいさよふ月。今宵

連 名もあはれ廿日の月。今宵

二十三日乃月

廿三日乃月のいさよふ月。今宵

二十三日乃月のいさよふ月。今宵

二十三日乃月のいさよふ月。今宵

二十三日乃月のいさよふ月。今宵

二十三日乃月のいさよふ月。今宵

二十三日乃月のいさよふ月。今宵

二十三日乃月のいさよふ月。今宵

二十三日乃月のいさよふ月。今宵

二十三日乃月のいさよふ月。今宵

二十三日乃月のいさよふ月。今宵

二十三日乃月のいさよふ月。今宵

二十三日乃月のいさよふ月。今宵

二十三日乃月のいさよふ月。今宵

二十三日乃月のいさよふ月。今宵

二十三日乃月のいさよふ月。今宵

若葉の縁白うれば月けのつらと
待て倍の勢至がきつていつて拜
むきり正ふ九月三ヶ月の月約
とつひと秋の月と拜り

有明月

十又秋以後の月之月
ありあけのつと

秋の的のつとをうくこゆ割と
あつとむむううたあけのちうーま
ま本

心の際と新れことえよ怪なして
窓より出のありあけの月 寂蓮

連あ明の月あはむらふは思
ありあけのつと

俳ありあけのつとにまのま正秀

狂人の世はひまの秋とつひあが
あつとむむううたあけのちうーま

あつとむむううたあけのちうーま

待月

詩身ともよにまよと
秋の月と

あけ俳の三秋かり

俳待月や待てもまれぬむ後ま考

秋山乃とれまよとまれむらひうりま
つれをく見えて月ぞまよとま 仙洞

残月

月のまよと後ま明
あつとむむううたあけのちうーま

秋まよとつとゆふのまよとあけの
あつとむむううたあけのちうーま

あつとむむううたあけのちうーま

あつとむむううたあけのちうーま

俳秋のまよとまれぬむ後ま考

残月や待てもまれぬむ後ま考

狂月秋のつとをうくこゆ割と

照月次

三日月のつとに
あつとむむううたあけのちうーま

秋あつとむむううたあけのちうーま

あつとむむううたあけのちうーま

あつとむむううたあけのちうーま

あつとむむううたあけのちうーま

星月秋

星のまよとつとをうくこゆ割と

星月秋のつとをうくこゆ割と

あつとむむううたあけのちうーま

の舟とて人舟のつるあはれもいふ
るが新篇藤倉志こをさる

秋 堀川百首

常陸

我いさうかまらうと云ふえゆけが
わ一月夜こそうまうかりけれ

身入

お風か人のさうらふま
こむかむあがらうのん

通志

秋

岡のぐやうのさうらふ風
のさうらふかたの秋のさうら

非 多のむかやうの衣杖の風 綴巴

秋の聲 せんもたう物よふれて
さうらうのさうらう

俳 郭公の幽具の杖の聲 梅水

引くても短やうさうのさうら

詩 古文秋聲賦 歐陽永叔

方夜讀書聞有聲自西南來

者 永叔が夜書ラヨニテ并タルニトコトモナシニ
コエカアリテ西南ヨリ來ル

悚然而聽之日 テ云フコトニハ

異哉初浙瀝以蕭颯 コトシヤ

ハシメハサラクトシテ
モノサビシク

忽奔騰而泅泅 水ノナカルヲトカスル

如波濤夜驚風雨驟至 下略

ナミカ夜中ニタツテカヤウニモアリ雨風ガ

秋 杖のけりきとん

秋 杖の野のさうらと云ふは

秋 杖のさうらと云ふは

詞 杖のさうらと云ふは

松乃さ。杖。をさうらと云ふは

むらま。し。のさうらと云ふは

ら。藤。紅葉。さうらと云ふは

のさうら。尾なま。杖のさうらと云ふは

づしこ。晴るく。死ふかへ。古郷
物寄。席のひるまげ。白鳥。露
ちの。か門ちのりいぢ

①連いふくどまを物寄あるもま結巴
②狂うま女の中まらいた秋のやぶらんや
まけ花こそましくたりきれ 木才

秋山 秋のふいふたて画がごとく明らう
こつういしく何となくさびし

③秋ふれりぢのまげままらぬる
妹ふもくめんやま落るくはも

④詞雲なる。月はしのほる。指さびま
。麻うく。入やとれたまの夕日。紅葉

⑤有外秋のやまむら抵地ま
⑥俳修好者の紙帳よりや秋の山如衆

⑦詩 秋山五字對句

望中疑在野 山形圍澤園

幽處欲生雲 秋色露人宅

雲が立テ出ソウナ 居ル家モ三瓦

秋水 清く澄み渡る水とどどは
く冷たいろみぢうぢう

⑧歌ろく風と雲りる水と清りき
山川よりや秋のさるる人時唐

⑨俳秋霞といふまきりぢり秋は氷帯ら
⑩詩 滕王閣記

落霞與孤鶩齊飛 秋水共長天

一色 一レコニドチヘヤラ。秋水共長天
イトレニウダトミレバ。秋水共長天

秋水 秋水時不至 庄子秋水編
故事 庄子秋水編

⑪西侯ノ渚雁ノ間ニソ、ギ牛馬弁
セズ河伯吹然トレテヨロコビ流

⑫秋夕 秋の夜はまはるく
秋の夜はまはるく

⑬秋 秋のうら風萩のまはるく
秋のうら風萩のまはるく

影を今
かえりてせむ花ももろはらむるうりやう
うらけお家の秋の夕ぐれ 実出

影を今
まきま山の秋のゆへに 寂蓮

影を今
まらるるれあふとあかしのききき
まらるる候の秋のゆへに 西形

詞 抽くるし。病とひ。雲とひ。暮
夕ぐれ。暮とよぐ。遅るる。暮

うらばの風。ゆへにけしき。結とる
まゆへの夜。夕やあけの雲の

とらと。うらまきとけ。彼乃た暮。
連 夕やあけの夕の暮 周休

西 人暮るるまき杖の夕やあけ 和成
西 夕やあけの夕の暮 西二

詩 秋夕詠

趙迪

白雲深處野人家 白クモノフ
カイトコロ

倚杖閑吟日未 夕やあけの夕の暮 周休

斜 吟 夕やあけの夕の暮 周休

峯看不盡 江ノアチヲノカズノク
ノ山ノ秋ゲレキハ見

晚鐘殘雨入蘆花 入相ノカ子ノコ
一トムヲサメトカ

秋夜 杖の夕ハ日暮の夕杖の
候ハ一候此あいどとらん

秋の暮もまご明中ノ杖の暮は
いこび老の暮さうーつらん 資平

をのりといくたひすらん秋の暮は
ゆつらるる杖さあやいせぬ 実澄

詞 夕やあけの夕の暮は
うらまきとけの夕の暮は

ゆやうぬ。をたぬる。とり火を
うげつては。まがきまらぬ。

詩 秋夜詞

無名氏

高秋夜分後 アキノフカイジセツコ
ナカバカリニ

遠客雁來時 コキヤウヲハナレトヲキタビ
ニ居アノコヲキケハカナシイ

寂々重門掩 モノサビシクカドヲサ
レコメテ居レバ

無人問所思 名レモノ思ヒヲフテク
ルモノハナイ

混雑

け部は日令時令本
まがらうとふらぶと出

龍田姫

四都乃西より龍
田に往て登り竜

田彦もいふ秋のまはさめ出
造化の形を名はけとく

秋 我ゆい十月のたす龍田彦
ゆめはを風しらしとる

注 ちかづけのふらり美赤い
とらと龍田のいさぎのふが真室

秋宮

皇居宮の所なり
ゆるるの宮いふなり

らく東宮とあり春宮とも
中宮とも秋宮とあり

律の調 物は律乃調とす
二月はつ時なま秋と

子秋樂 此盤涉泪の曲
かろ。盤涉泪乃

秋 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

注 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

注 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

注 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

注 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

注 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

注 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

注 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

注 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

注 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

注 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

注 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

注 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

注 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

注 秋のむくは秋女即苑の風
くくくくくくくくくく

田の庵

田は福の實の入りぬる
時分昼の多分進ん

疾の麻糘うらにけりさきド
とて田のつこつこは飯菴を伴う
て田の守るる中て天智天皇は
かひ居るよまきせたまふり
てはつて飯菴の庵とつる
たり

小田守

小田とちち此氏を
いふ橋と猪熊の族

つぬみ小橋をとりあふ

案山子

案山子△名おど
△深み△おどい

田よあつちの地をけりしり
。信都の昔ま宿信都と云人
能を守りてを歌を歌はし
ぬしつるぬよりしを信都
つとて信都志りし案山子と信
都と云い信都信都のソホツなり

曾富騰

曾富騰△名おどい
△深み△おどい

古歌よく解せざる者の伝わり
そそつとそよぶつあまらぐ
そそつと今つる信都もま宿
みまらけしる信都の歌
歌のびきの心向えたるを
押のがたの心を今かく

山田守

山田守をまのりてその
杖をくぬきは同人も

信

信△名おどい
△深み△おどい

狂名押しるは信人の義を
いいてるまき宿のまき景天

添水

添水△名おどい
△深み△おどい

今世の民の制するの
あつて自の中よまき宿
引扱唱竿とて同種を制する

碓

碓うす 碓うす 碓うす のどくく みのをうす

けたら 碓うす 碓うす 碓うす 碓うす 碓うす

鳴子

鳴子なるこ 鳴子なるこ 鳴子なるこ 鳴子なるこ 鳴子なるこ

秋あき 秋あき 秋あき 秋あき 秋あき

引板

引板ひきいた 引板ひきいた 引板ひきいた 引板ひきいた 引板ひきいた

秋あき 秋あき 秋あき 秋あき 秋あき

鳴羊

鳴羊なるや 鳴羊なるや 鳴羊なるや 鳴羊なるや 鳴羊なるや

秋あき 秋あき 秋あき 秋あき 秋あき

車

車くるま 車くるま 車くるま 車くるま 車くるま

秋あき 秋あき 秋あき 秋あき 秋あき

焼帛

焼帛やきひら 焼帛やきひら 焼帛やきひら 焼帛やきひら 焼帛やきひら

秋あき 秋あき 秋あき 秋あき 秋あき

柁

柁しらべ 柁しらべ 柁しらべ 柁しらべ 柁しらべ

秋あき 秋あき 秋あき 秋あき 秋あき

柳

柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ

秋あき 秋あき 秋あき 秋あき 秋あき

柳

柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ

秋あき 秋あき 秋あき 秋あき 秋あき

柳

柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ

秋あき 秋あき 秋あき 秋あき 秋あき

柳

柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ

秋あき 秋あき 秋あき 秋あき 秋あき

柳

柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ 柳やなぎ

秋あき 秋あき 秋あき 秋あき 秋あき

詞 ちびくこくき。まのく為。朝
曙の落丸る。村いき。一村為。
た。まかき。秋風。か。

俳 へんし竹輪ふむとぶ為る其角
秋風のどがうらうらむ為る吟

連 秋とつべお為るびく為る末紙

系 薄 系細く糸のうくまき
にみよ及ぶわいのけ

俳 いとまきとつべ娘のうらふ方并
どすきとほくまねと生ん

秋 葉のせんまをらうけ白為る
まねくねけらうとまき

名 正しきこくきうらうけ極まで
あらうの葉のまねをせんまを

くどん △ま葛くどくう。
ま葛ともまねく秋風

いろがふるとよちば秋葉とせうな
まねく葉もく系その葉は付て
解くやううくあく表あそくう
白く秋風はひらううり葉系あ

まねくがまのれが秋人葛の葉
のうらうと後て人の眼のまを

秋 葉まこくまねあねのま葛とら
まねくうらうとまねを 物洋

うの岡は葛うらまねまをまねし
まねくまねとまねをそのれ 明珍

詞 へんし秋風。まねもまねぬ
まねくまね。うらうら

連 秋の風はまねく葛葉もまねぬ
まねくまねのまね山まねくまね

往 葛の葉のまねのまねまねまね
まねくまねのまねまねまねまね

思 草 出せうのの秋風
まねくまねのまねのまね物と

つうと齒田の秋のまねのまね物と
まねくまねの秋まねのまね

たぐう補送まねく論以
まねくまねのまねまねまね

佛 忘のまねのまねまねまね

葛

〔異名〕蘿艸。赤葛。五爪葛。赤淡皮。烏次葛。八寶葛。

秋に熟したり人家の壁間に極て
秋に熟すに葛とは蔓物の惣
名なり名不熟まじくして肉を
まじりて食せぬものれと連飲の
法はのりて葛もさくともく

芭蕉

〔異名〕甘蕉。芭蕉。芭蕉。天
直△やまむせを 九月の

ふゆの風うはなをぬくせぬま
く根ふたのむ名どりのうき 表

〔俳〕

舟とゆり帆ころの芭蕉か一晶

〔詩〕七言對句

詩礎

長葉臨風標緑幹

清更妍

ナガイ葉ガカセニムカフテニトリ
ニキアラハレニニセル

キヨクシテ
又ウルハレハ

赤心凝日吐丹誠

不眠愁

アカイニニガ日ニウツツテ
カメチアラアラワニニセル

ヨラズレテ
ウレハヤウナ

景天草

一名散花州〔異名〕瓦花。
掛碎土青。天竹〔和名〕

いさむ。りくこてきうま。うき
うき。秋まきやい思女子のけし
りくそら葉の影に似たりけり
秋に掛せども凋らるるは後をを

草花

△ま舞の花△百竹の花△種
花の影の舞 備後此花

とまきく秋咲花葉をた 款くど
女師たるてしこ其外何ふらう
と秋く花をまて秋は秋の
らふらふらふらふらふらふら

秋に熟すに葛とは蔓物の惣
名なり名不熟まじくして肉を
まじりて食せぬものれと連飲の
法はのりて葛もさくともく

秋に熟すに葛とは蔓物の惣
名なり名不熟まじくして肉を
まじりて食せぬものれと連飲の
法はのりて葛もさくともく

〔詞〕

秋のまきく花のまきく花のまきく

〔漢〕

秋のまきく花のまきく花のまきく

(連) 朝霧をよそふるうららかに花は式官白
咲さうらむらじぬ死のうつくさるゝ家牧

(俳) 若花や秋より色に秋ありく 蓬二
月けくゆけ花を夢さゆのうらゝか景

(狂) 花の海に舟をたよせさせたまは
るておとしくゆれおさるりより 由英

詩 草花詞

幽閑不附 睡蘭芳 コノ草花ハカ
ニスカニサヒロイ

日向江濱占 タノコニ咲テ南ナトノ
タノコカフコウヒニヒ

道傍 ワガテニ江ノホトリナドハ(女リ道バ
タナドヲスミドコロニシテ居ル)

晴日暖開粧麗景 セイジツアタカヒラキヨホ
イケイソレデモ秋
一日ノカルヒシタ

吟郷 ニオホヒカケルヤウニカホラセテ詩テモ
ツクルコノロニサセルデアラフ

香蒙詞客入 カクガセニカ多イ
アタカナジフニハウツ

鷄頭花 異名 洗手州。一及雲。
紫冠の花の飛鶴のと

排去師村 さうらむらじぬ死のうつくさるゝ家牧

雁素紅 あかしの花を雁素紅と云ふ
あかしの花を雁素紅と云ふ

花と針 花と針を並べて
花と針を並べて

合侍 合侍を並べて
合侍を並べて

おのり おのりを並べて
おのりを並べて

とく とくを並べて
とくを並べて

狂 狂を並べて
狂を並べて

詩 雁南來塞草秋 葉ケイト
ウラ鷹来

己先愁 己先愁を並べて
己先愁を並べて

緑珠宴罷歸金谷 リヨウ珠ト云フ
一美人カ酒宴ス

夜不收 夜不收を並べて
夜不收を並べて

珠方夜 珠方夜を並べて
珠方夜を並べて

白方 白方を並べて
白方を並べて

-5 80 35 960" data-label="Text">

珊瑚 珊瑚を並べて
珊瑚を並べて

紅々 絢 綵霞 白イト赤イト方線ツタ。木

丹 雖 好 不 如 它 ホニシモノヨイモノレヤケ

無 端 蜂 蝶 休 相 近 此

種 元 來 不 是 花 長香ヨリハイトクニ

白 茅 △茅壹 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

小 児 好 ん て 欲 ぶ 志 小 児 食 一

て 甚 益 効 一 根 を 茅 根 と 志

又 俗 又 阿 婆 根 と の 小 茅 栲 皮 炭

△ 高 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

角觝神

世の蓋をまひり合
小思のたのむとくはた

相撲

よのちの龍舟拵でかまるとく

佛

其のよむいざどしんをまひりし由

犬子神

又拾尾神と云名。其の杖
撫ち形かの鹿の皮に又栗の

樹

又樹のうり依葎の栗と云

秋

其のこ所抄がら落く穂は出く
秋をくは色れ玉中からん

狂

何れもてまねぬりのよへのころと
まなくしはなうぬをりなり

萩殿

小の方之萩を挿らうと名
付られらるゑ又葉抄目録中其の所

萩

所之萩はかぎらぬ萩の花つらく挿
らうとをて時代はよりて勢と云

秋

續千載

後永極

萩のまの花の下を於津溝み
らくせの萩のうけそらうと云

連

萩の房のつらくまじし此のうけ思此

佛

萩の戸やまら 葉を挿れ萩は浪化

狂

萩の戸やまらうくともらぎと云
がらうら萩の女房をうり

花壇

△花畠。まの花れ畑之。神の
まのまらう萩咲成変と云

詩朗詠集

前載

多見我

花悦目傳 花ヲヨココハ
テ目ヲヨココハ

見ルニ

先時豫養待閑遊 時々
ス人々ヲ

家僮

自吾閑寂 自ヨリワカ
カニヤク

樹春栽

秋草 秋 春木ハ春之秋ノ
草ハ秋之ルコトヤ

任

まはあふぬらうくうらうら

鬼

姑娘葉。非代巻は破葉

カ、チと訓せりに入月よりなるを
りき秋実と心と也

○**佛** 鬼灯と名くこくぢがうむる酒を
鬼灯や医者感して、心腹の腫れ志
狂りづこころろろのきよ亮あけて
かゝるきとさくらんらうなく 神幸

新番椒

番の番田そまいと圃の
まじけ地を南蠻よりき

うりし新番椒と云へ天正癸亥の比
物ていつしと伏見又藏物にて大き
幸うけし其外種類あり

○**佛** 石臺とついで根もたや唐がじし地波
餘りこれ杜やふけりともし蓮二

若烟草

漢名烟草 異名相思草
洗濯婦。還魂草。葦。

布瓜

本名糸瓜。絲羅。紡線。
○蔓畑をり六月七月に黄

あつた花ありくへ干くさとい雲雀ん
遊せつらまれば若き物をまく回樂

と一食用よ死の

○**佛** ぶくとともうろの糸瓜也由之

○**狂** 世の中ふらうとさういふのうへ

うんのへらまれののりまなり 佛
薬用 夏の冷る糸瓜の水をい

くびもなるべし一冬寒さを忘る

薑

新羅薑 ○**佛** とうもろこしや菜の
まうまてと根りしうも 露川

○**狂** 世とらんとはまきとけりたり
あがり汁もぬくばあてり 若州

牛房

○**和名** 悉矣。一名牛房

芋

異名 土芋。踏踏の家芋
○**和名** 西踏。白足芋

芋の種類多し 本草より十は種
を奉ぐが新種ありし 圃へ水出

うりて新もあまなり 圃石の方ま
まうらん一信まのなむあるるし

顔の芋

一名紫芋。既芋とも
○洛の赤寺村九条村

のりの天下にれまゝして芋の尻丈はし
て九三斤斗の拍あり茎と合ひま

又いはいど又いはいどとてい

御一箱のきこや芋のす斗刈ま考

狂秋果は毎秋うらんでうく考

わいふも似さうへいせやうなり 自見

葛 山葛。根條徳聖

山薬の種多し

山薬ともいふ。里に栽るもの

ついでにいふ又うま芋とも云也

別名佛堂昔者云芋の形をい

るげうらぶれんをいとまの圃を

い麻芋ともいふ又柿芋秋柿のこ

長芋家山薬けり皆葉の形ら

月ドロとて甚からざし。昔者花

時風水候ふゆいどて穀又穀す

るの古代より傳へくるものなり

佛 堀ふいし根根や山のいし葉二

解生やしし相馬の内裏は昔ま

粟 餘り 昔者花の葉よせとれ
食用とれたり

村 諸 久保のよと久アうきう
より後摩へとる

果 栗。栗。桃。栗これと
又果ともいふ又芝の果と蕨

と云い外本果多く秋出のつたり
新勳秋教 深規

誰 ももまわけりそのそのり
明考

けりあうらうもなうきく免やみ
おきそうにんえても枝乃果が昔葉

そうし月のをいふをよもこのくも 再伴

柿 異 赤皮果。去冬令。霜長者
乳卵。蘇心。朱果

歌 教 木 後れ

世にうらうきこのしうり

連 葉はし後身がせよ柿の葉 宗志

餅 柿もよ皮分くくく張腹る大身
柿の本ヤとく自腹の親仁出。出膏

詩 七字對句

詩 礎

垂枝星實粟々熟 千顆蜜

タレサガリタル枝ニ星ノヤウチ実 カスノミ

帯葉霜皮顆顆乾 一林霜

タイヨウサウヒノカハカクカク イナリノシモ

栗ツイタ柿ニ粉ノナイ皮カ ハヤニハイニ

柿の種歌 △御所柿和及御所

村よりあつも乃 宜とととるあ

ちぬ柿と云 和州とて平柿と云

狂 △似柿は不柿の似く味おとまり

△遊 徹柿味とよくととて肉

と現通るがぶくく 火入り号く

△朱柿 形たまふのくくコ子リ

△小形 ともくく語をり

歌 著用集

泰光法師

霜柿のるくわり此柿をのぼり

ふくもばきありあふとわり

△箸柿 かくら小中て長く推

箸乃くくく又方とよくく山

ちこと柿とよくく

餅 管柿やゆじの霜よままれ 昌房

衣の外ハミち柿。於棗柿。田倉

柿。之保柿。桑社柿。若遷又

多持類まきく 國々の水去より

て味も柿とよくく

餅 濃柿を石皮よ浸し又

浸して先出せば味甘く 斐るなり

餅 淡柿や濃柿をりれ 我々ら其角

△ 包柿 柿の言きりのを差ぬ

△ 弱柿 濃柿を名にのるぎつりて

柿 乾があら甚美たり

柿 柿を名にのるぎつりて

橘たちばな 漿じょうと抄しやうろくし果くわの粉こなよ

和わく菓くわく餅もちと味あじ

食用じゆうじゆうよ蓋ふたあり

佛ぶつ持ぢ世せと味あじくく人にん初はつ合ごう

梨り子こ 異い名な 香かう回かい果くわ。干かん漆しつ雪せつ。

種しゆ類るい 水みづまじり山さん梨り梨り△まじり

△本ほん梨り梨り△迎むかひに梨り本ほん。松しょう尾び梨り本ほん。空くう

附つ梨り一いつ浦うら梨り本ほん。大だい梨り。津つ野の秋あき

回かい不ふり出でる人にんのりのりの同どうり

まじり六む寸すんあり大だい梨りくく入い道だうにま

しり志し加か梨り果くわより出でる日にち梨り果くわを

梨り本ほん芦あし浦うら梨り果くわより出でる空くう閑かんな

しり肥ひ老らうより出でる

六む非ひ 衣い美み危ゑ大だい居い

来きるまじり六む寸すんあり大だい梨りくく入い道だうにま

りゆぬもかよもみこそをりぬを

非ひは梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

み梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

往かうけあげたる鞠きうのくまり

庭にわの指さしま何なにりやありの實じつ未み得とく

初はつ妻さい梨り 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

秋あき田でん 山さん松しょう乃の本ほんのり

はく秋あき田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

秋あき田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

田でんのり 梨り果くわの維ゐま何なにてくま梨り果くわの維ゐま

〔柳〕 茲因の柳を因さるるを因正香

〔柳舟〕 いち舟のついでに舟を名づる

〔柳〕 川を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

〔柳〕 舟を名づるに舟を名づる

石筑の福こき出てより寡婦業

多しありしに後号て寡婦業と云

新米 △新米と云ふは新米の八月

綿糸 △本綿糸。種はありて

今何の右の綿糸なり

秋の葉 △秋の葉は秋の葉

桃吹 △桃吹は桃の吹

秋生類 △秋生類は秋の生類

和の △和の

異名 △異名

名 △名

△麻 △麻

△麻 △麻

△麻 △麻

△麻 △麻

△麻 △麻

△麻 △麻

△麻 △麻

△麻 △麻

△麻 △麻

△麻 △麻

△麻 △麻

△麻 △麻

△麻 △麻

△麻 △麻

秋の芳よ友をよまるといふ

あき

あき

秋の芳よ友をよまるといふ

あき

あき

秋の芳よ友をよまるといふ

あき

あき

秋の芳よ友をよまるといふ

あき

あき

秋の芳よ友をよまるといふ

あき

あき

秋の芳よ友をよまるといふ

あき

あき

秋の芳よ友をよまるといふ

あき

秋の芳よ友をよまるといふ

あき

あき

秋の芳よ友をよまるといふ

あき

あき

秋の芳よ友をよまるといふ

あき

あき

秋の芳よ友をよまるといふ

あき

あき

秋の芳よ友をよまるといふ

あき

あき

秋の芳よ友をよまるといふ

あき

あき

秋の芳よ友をよまるといふ

あき

あき

山家

田舎麻

西行

小山田の菴らうくひく麻のまよ

押さへりて押さへりて

本の下から麻やうくらん

後後拾月麻

山家

田舎麻

西行

小山田の菴らうくひく麻のまよ

押さへりて押さへりて

本の下から麻やうくらん

後後拾月麻

山家

田舎麻

西行

小山田の菴らうくひく麻のまよ

押さへりて押さへりて

「蘇苗之谷の圃」ハナハと云く、疾風終

「陽」ハナハと云く、秋の真の自

「狂」ハナハと云く、秋の真の自

「海」ハナハと云く、秋の真の自

「春」ハナハと云く、秋の真の自

「中」ハナハと云く、秋の真の自

「詩」ハナハと云く、秋の真の自

「鹿」ハナハと云く、秋の真の自

「詩」ハナハと云く、秋の真の自

「作對」ハナハと云く、秋の真の自

「成」ハナハと云く、秋の真の自

「又」ハナハと云く、秋の真の自

「ヤ」ハナハと云く、秋の真の自

「田」ハナハと云く、秋の真の自

「顔」ハナハと云く、秋の真の自

「裾」ハナハと云く、秋の真の自

「ア」ハナハと云く、秋の真の自

「中」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

「以」ハナハと云く、秋の真の自

秋 恒根は徳のあふたてくも
まで乃田長よまのびくつ、後れ

秋のやふ徳乃又さしい、かうん
森うたむとふく、乃凡花先

秋 二徳や徳は進る又後る 三惟
目を徳徳。徳と補る

鷓、と
目を徳徳。徳と補る
と徳を、とつり

けも乃目をぬいて、まぢああり
と、徳をかこじめて、高友と、
て、るなり

鷓田 将の回乃、吉を、除る
唐土、は四附、ありて

杖を、鷓と、鷓、殺、杖の殺
る、よ、ま、乃、志、あり

鷓 鷓の羽、搥、百羽、搥、うは
一、ま、か、し、ま、か、り、一、ま

本、名、徳、入、徳、う、入、田、を、
い、鷓、の、ま、い、田、を、合、せ、ま、ま、い

ま、ま、は、あ、り、徳、其、ま、じ、は、十、八
ふ、あり、と、つ、田、の、同、は、徳、

交、て、鷓、を、鷓、に、雨、殺、さ、り、
教、人、の、徳、ま、三、才、田、舎、本、草、出、

ま、ま、け、て、ま、く、鷓、と、ま、ま、
百、羽、が、ま、又、羽、う、ま、ま、

あ、つ、ま、ま、の、ま、ま、ま、ま、
君、が、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

外、衣、と、ま、ま、の、房、の、う、ま、ま、
徳、ま、ま、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

詞、百、羽、う、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、の、鷓、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

東にまぐいほすり敷よのまぐ
涼州せうしうし合せこれん城の

名あらういづくもくさふく荒
世よあうして疾ひいづく飛登

夢に伏し竈は其性淳う
横州をうへに多に居る雲を

まぐい地りあさうて安んじ
ぬ又聖人勢居にうへい 其子

敷ハキ、コいふが如し△斤勢
ま歸んちりて居るをらふ△駢

勢ハ奪うようけ合とらふ藻
△勢の態△ぶくれう一不とら

まじくさうふさう敷ようづの
床い何れよりりともより△勢

舞いういを飼養のふさう
△勢細いづくをえ細さう

山に枝の葉ぐま目とら
外面ののううづり鳴りま

山田守るまそけあやういけ
何せついで勢あしうへ後

詞尾花がぐまをのぐうと
の床。わけなう。里のうづ

をうやう下。まのまがたよ
をのぐ床をうと。押月。あ

野。霧の控。はれいむこま
くま。くろつてみか。

佛ううそ略まはやまの浦遠
栗のやと見よう射やうう全

狂後だくり准とむらてうづ
くまも梅葉ようううり奥丸

鱸 **名** 肥魚。紅文鱸。鱸
海魚。松江魚。

川よも海よもあり大はよう
名を異よとらふとせくとい

秋 秋風よとまづる舟うら
うのこしは名おまひく 西形

あまもやんちん鱸の秋を人
秋の後の更舟の浦よ舟あ

月よあはれ鱸うらうん 雲

(在) 六々 楚料理の字より

事

鱸

南郡記曰吳人臨

金 燕 玉 膾 東

煬帝ニ獻ス帝曰

秋風起

昔書曰張翰字季

大司馬東曹掾上九秋風起

ヲ見テ忽成故鄉胡中萼菜

唯コロサシニ適スルコソ貴メ何ソ

此數千里ニアリテ身ノ名跡ヲ

要センヤトス三ヤカニ宦ヲ棄テ

吳中ニ皈レリコノ意

鮎

吹波。鮎魚。沙鮎。阿浪魚。彈塗

魚。川鮎海ちうれあひあり

く水。鮎。鮎。鮎。鮎

八月の鮎。鮎。鮎。鮎。鮎

舟と鮎。鮎。鮎。鮎。鮎

浪花川。鮎。鮎。鮎。鮎

狂。鮎。鮎。鮎。鮎

江。鮎。鮎。鮎。鮎

山。鮎。鮎。鮎。鮎

無。鮎。鮎。鮎。鮎

鮎。鮎。鮎。鮎。鮎

先を乗る願とほして其を多成然引
よのよきれとも誠中此物よや

鱒いづき △いざー引 省河紫とら又
紫むらさきともつふたり

あゝの海激うらみすてけり後小いじし
のどろくろみ抄びし

佛ぶつ小いしや一にかた蘇す美の門 晋子
玉たまうら海うみま衣えやいし

鱒雲いづき 秋西の雲あきにしきり赤あかき
その入いけとれ鱒いづきま

佛ぶつ山やまいくつ七なな目め徒たふいふいまま一ひと雲うみ未ま示し
かか其その皇みかどとむらりあまのの御みこも馬うま成なり

狂くる々々ぐれの秋あきををふらてふらてていいまま一ひと雲うみ
いいははりりああららききののああららももおお下くだ

妙たふ業ご耳みみされされままくくああららまま一ひとのの歌うたととあ
ややままははてて飯いづづぶぶまませせてて耳みみのの根ねふふぬぬるる

緹あま藻も 秋あきののああららままくくああららまま一ひとのの海うみもも付つ
水みづ勢せままああららままくくああららまま一ひとのの海うみもも付つ

佛ぶつををううちちててままららままくくああららまま一ひとのの海うみもも付つ
佛ぶつままららままくくああららまま一ひとのの海うみもも付つ

三和部終

俳諧作意早傳受 全一冊
雅な俳諧傳の妙傳とみくぐを

集あつめめ其そののの名な句くとと集あつめめ其そののの名な句くとと集あつめめ其そののの名な句くとと

名な人ひとのの句くとと加くへへ添そへへ守まもりり外そと前まへ句くのの心こころ

梅うめももかか梅うめのの後あと句く俳はい諧かい教くわう百ひゃく句くとと必かならず

俳林名句註解 全五冊
俳諧古今の名句と集めよき

七なな夕ゆふ由ゆ来らるるへへ記き 全一冊
七夕天の川のよと来りあはしと

七なな夕ゆふ由ゆ来らるるへへ記き 全一冊
七夕天の川のよと来りあはしと

文化三丙寅歳發行
文化三丙寅歳の候り

浪花書舗
浪花書舗

